

「アフガニスタン」より帰りて  
〔昭和十四年〕五月五日 ラジオ放送原稿（決定稿）

尾 崎 三 雄

## 〔目 次〕

1	序言	六時二十五分 <sup>1</sup>
1	位置	
2	(入国の)順路	
3	地勢	
4	気候	
6	住民	
7	言語	六時三十分
8	宗教	
9	思想	
10	人情	
11	挨拶	六時三十四分
12	風習	
17	類似	
18	産業	六時四十分
21	制度	
22	国体	
23	国際	
25	結論	
25	レコード	六時四十六分～五十四分

---

<sup>1</sup> 尾崎の「日記」によると午後 6 時 25 分からの放送であった。

## 序言

私は農業技術者として昭和十年から三ヶ年間『アフガニスタン』国政府に招聘せられ各層階級の人々と一緒に働いて居りましたが人種が錯綜しその上各層階級で生活様式、知識、心の持ち方に大きな差がありまして「アフガニスタン」の真相を知ることは非常に困難であります。大体中層階級の農民を標準としてお話し申し上げることに致します。

## 位置

「アフガニスタン」はお伽の国の様な美しい宮殿といかめしい王様の沢山住んで居られる印度と千夜一夜物語の国「イラン」及理想と現実の矛盾の犠牲となって地獄の責苦に悩んで居る露領中亜細亜に取り巻かれて居る回教王国であります。

## 入国の順路

入国順路は印度経由と「イラン」経由と「ロシア」経由の三つありますが日本からは印度経由が最も便利であります。船で「ボンベイ」又は「カルカッタ」に上陸し其処から汽車に乗って二日二夜印度側国境の町「ペシャワール」で自動車に乗換え一日又は二日で人口十八万の「アフガニスタン」の首府「カブール」に着きます。僅かではあります「アフガニスタン」は支那とも新疆省で境を接して居りまして此処を通る道は昔は亜細亜の東と西を結ぶ重要な道でありました。

## 地勢

国の大きさは植民地を併せた日本と略々同じ大きさであります。

国の略々中央をヒンヅウクッシ山脈が走って居り、印度との国境には「スレイマン」山脈が横【たわ】って居ります。何れも一万五【、】六千尺から二万五【、】六千尺の高さで萬古の雪を頂いて居ります。

大体山と沙漠の国でありまして平均の高さは海拔六千尺であります。

## 気候

冬は相当雪や雨が降りますが夏は殆んど雨がなく非常に乾燥した国であります。食物も腐敗する前にコロコロに乾燥してしまひます。土地の人達は水浴を好んで致しますがその時体に着けて居った布類を乾かすのに友達同志<sup>ママ</sup>が布の両端を持って道を歩きながら乾かして居るのをよく見掛けます。五町も行かない内に乾いてしまひます。紙を切るにもナイ

フを用ひません強く折目をつけて両端を引れば切った様に奇麗に裂けます。

気温は差の大きい処でありまして「カブール」附近で夏は摂氏の三十五度から四十度位まで昇り冬は零下十度以下に下 [が] ります。又昼と夜とで約十度位温度の差があります。しかし乾燥して居りますので真夏でも汗は殆んど出ず厳寒もさほど身には感じません。強い太陽の照りつけを避ける為め土地の人は夏でも冬とあまり大差のない地質の厚い着物を着て居りますが汗がないので少しも苦にならならず寧ろ薄着をするよりも涼しいそうであります。

## 住民

「アフガニスタン」とは「アフガン」人の土地と謂ふ意味でありまして此の国の住民の大部分はアフガン人種であります。「アフガン」人種は「アリアン」系の人種でありまして頭髮眼こそ黒色でありますが皮膚の色は黄よりも白を多く含み鼻は高く容姿は殆んど欧州人であります。アフガン人種の外蒙古系の「ハザラ」族、土耳其系の「トルコマン」族も相当住んで居ります。此れ等は容姿風体全く日本人其の俣であります。此の外沢山の人種が入り雑 [ざ] って住んで居ります。

人口は統計がないので良く判りませんが千二百萬から千八百萬位の間の数字で色々と示されて居ります。

## 言語

「アフガン」人は地方的には語彙の上に可成 [り] 大きな差を持っておりますが「アフガニー」又は「プシュトウ」と呼ぶ自分自身の言葉を持って居りまして国内割合に広く用いられて居ります。しかしどう謂う訳か少区域の住民しか使用しない「ペルシャ」語が官用語として用いられて居ります。しかし現政府は二三年前から「アフガニー」の普及を企図して居り官用語も将来は此れに拠らんとして居ります。此の外に印度語ベルチスタン語、トルコ語、其の他十数種の言葉が使用されて居ります。

## 宗教

住民の殆んど全部が回教徒でありまして王様は至高の回教徒であることを憲法として居ります。「アフガニスタン」の回教はスンニー派に属するものでありまして「イラン」のシーヤ派とは幾回となく血で血を洗う様な争を演じて居るにも不拘「アフガニスタン」の官用語が「イラン」の国語たる「ペルシャ」語であるのは面白いことであると思ひます。

## 思想

「アフガニスタン」の回教は「スンニー」派でも特に純粋のものであることを誇りとして居りますが、その一面物の考へ方見方生活様式、政治の取り方等が、時には奇異の眼を見張る程回教の教義の形に捉はれ過ぎて居る処があります。

「アフガン人」の人生観は或は回教徒全体に通ずるのかも知れませんが天恵の少ない山と沙漠の中に住んでいると謂うことも一つの理由となって極端な宿命論的なものであります。そして物の考へ方看方が甚 [だ]しく現実的或は直接的であります。早くから欧州文明に接するの機会を持ちながら今尚現世紀の文明を享受して居らない理由の一端は此の辺にも深い根を下して居るのではないかと思ひます。「アフガニスタン」に只一人の「マルチンルーテル」も出ないのかと残念に思ひます。

## 人情

回教国の血を見ずしては止まない悲惨な歴史の反復は数回に亘る他種族異教徒の侵略蹂躪を受けたのと相俟って「アフガン」人の気持と謂ふものを非常に猜疑さいぎ的なものにしてしまひました。そして極端な宿命的人生観は彼等の勤労精神を喪失させてしまひました。しかし「アフガン」人本来の気質は非常にスナホで人情味に富み義の為めには命も惜しまない人種であります。

又非常に人なつこい人種でありまして同宗教の人であれば誰れでも彼でも「オー、兄弟」と呼び合ひます。

## 挨拶

挨拶は又非常に丁寧であります。右手を胸に当て少し上体を前に倒し「平和があなたの上にあります様に」と祈りますと相手も亦「貴方の上にも亦平和があります様に」と祈り次いで「お達者でありますか」と謂う意味の各種の言葉を五六遍取りやり[やり取り]し「神のお陰で」と謂 [う]言葉で挨拶を終ります。

久し振りの出合或は儀式の時には兩人抱き合ひ色々挨拶の言葉を交しながら右、左、右と三回互に頬を食っ付け離れて両手を握り合ひ、最後に右手を胸に当てて挨拶を終ります。

## 風習

「アフガニスタン」は回教の教義を[固]く守っておりますので、他の国で見られない特殊な色々の習慣を今でも堅持して居ります。その一つは婦人が夫親兄弟親族特に親しい人でない限り男には顔を見せないことであります。外出する時は引きずる様に長い目の処丈網になって居る袋の様な被りものをして居ります。家庭に於ける男の訪問者は屋内の婦女子

が訪客の眼の届かない処に処置されてからでないといふ屋内に通されません。

職業婦人は勿論ありません。商店でも飲食商でも役所でも会社でも男の出入りする処には全然婦人は居りません。婦人の居らない街がどんなに殺風景なものでありますか、只灰色一つの世界に住んで居る様な焦燥をさへも感じます。

豚の肉は全く食べません。又酒類も全然飲みません。

「アフガン」人は緑茶を非常に好んで飲みますので至る処に茶店が日本の「カフェー」の様に繁昌して居ります。お茶をグラグラ煮立たせ最初の一杯丈は砂糖を入れ二杯目からは砂糖なしで飲みます。

「アフガニスタン」の冬は只一つの土色と化してしまひますが春になりますと花<sup>ズ</sup>ホウ杏、李の花叢が土色の世界に夢の様に浮き出して参ります。そこで日本ならば一瓢<sup>たづさ</sup>携へてと言う処であります酒のない国でありますから、茶道具携へて花見の宴となります。赤い毛せんを敷いた茶店も開かれます。花の下ではあちらでもこちらでもお茶を飲みながら又食べながら手拍子面白く歌い興じ、踊り興じます。飲むものこそ違へ日本の花見風景と何の変わる処もありません。

男女相<sup>まみ</sup>見えることが出来ませんから「アフガニスタン」の結婚風習は非常に趣を異にして居ります。結婚式が終る迄夫たるべき人も妻たるべき女を見ることは出来ません。そこで嫁の品定は母親の役となって居ります。従って結婚式が済んでから思はぬ悲喜劇の起こることも時折ある模様であります。結婚式も客事も男女全く相<sup>み</sup>見えざる別室又は別家屋で行はれます。花婿の為には男客の席に花嫁の為には女客の席に別々に式場が作られます。儀式は夜<sup>よる</sup>晩く宗教儀式を以って行はれますが神秘的な美しい行事が祈祷に伴って行はれます。

## 日本人の生活と似た点

「アフガン」人の風俗習慣には我々日本人と似た点が沢山あります。

現在の「アフガン」人の服装は絵にある神武天皇様或は聖徳太子様のお召しになって居られる御<sup>おん</sup>服<sup>ふく</sup>其の儘であると言ってもよい程良く似て居ります。下駄も下層階級ではありますが広く用いられて居ります。床の上に足を折り曲げ又は日本式のアグラをかいて座るのも日本人其の儘であります。寝るのに床に蒲団を延べるのも全く同一であります。風呂敷も大いに活躍して居ります。米も沢山食べます。楽器にも日本の胡弓や琵琶に似たものがあります。印度との国境近くなりますと禪も使用されます。稲藁のワラジさへ見られます。私共の祖先と何等かの関係を持つのではないであらうか。

## 産業

此の国の主たる産業は農業と牧畜であります。

農産物としては小麦、綿、亜 [阿]片、生葡萄、干葡萄、柘榴、干杏、メロン、アーモンド、ピスタチウの良いものが出来ます。殊に葡萄、柘榴、メロンはおいしいこと見事なことに於いて世界に誇ってよいと思ひます。

非常に乾燥して居りますので小麦でも果樹でも蔬菜でも全部水を灌漑して耕作して居ります。

石炭石油がありませんので燃料は薪炭による外ありませんが山は殆んど全部禿山でありまして材木も非常に少[な]く高価であります。故に牛糞馬糞が盛[ん]に燃料に使用せられます。

工業は漸く起りつゝありますが動力用燃料が充分にありませんので其の発展性には疑問があります。水力利用の途が開拓されるか否かによって其の解決が与へられるのではないかと思はれます。

鉦産物は今の処工業化される程産出あるものはありません。

経済界の実権は印度商人の手に握られて居る様であります。

以上「アフガニスタン」の自然的事情の大要を申し上げましたが少し制度と外国との關係を申し上げて見度いと思ひます。

## 社会制度

住民は大体原始其の俣の遊牧民、半遊牧民、穴居生活民及[び]現代的生活様式を取っているものとの四つに分けられますが最も現代的生活様式を取って居るものも其の社会制度に於いては多分に封建的要素を含んで居ります。

酋長と言つては言葉が悪いかも知れませんが或る地域内又は一纏<sup>まとま</sup>りの種族の上には其の頭目ともなるべき有力者がありまして勢力を張って居ります。しかし現在では印度との国境スレイマン山脈の中に住んで居る蕃族を除いては大部分現王朝の支配下に伏して居ります。

現在の「モハマッド・ザイ」の王朝は今から十一年前の一九二八年にナデイルシャー・ハン王によって樹立されたものでありまして回教の始祖「モハマッド」の正統の後裔と称せられて居ります。

## 国体

「アフガニスタン」は一九一九年に前王朝の最後の王様アマヌラ・ハン王によって英国の支配から離脱し現王朝によって現代的立憲政体の国家の型が作り上げられました。然し未だ政宗一致の政治でありまして各種政治、行政機関 [の]多くは単なる賛成又は事務執行機関たるに過ぎません。

## 国際関係

一九一九年に英国から独立して以来諸外国と大公使の交換が行はれ現在では露西亜、イラン、トルコと大使を、日本、独逸、伊太利、英国、フランス、エジプトと公使を交換して居ります。

「アフガニスタン」の政治的国際事情 [に]就きましては申し上げる程の知識を持って居りませんが英蘇 [蘇]手は相当深い処まで入って居る様に思はれます。そして独逸、伊太利、仏蘭西トルコの勢力も入り雑 [じ]って「アフガニスタン」が亜細亜に於ける欧州勢力の相克の場所となりつゝある様であります。

日本公使館は昭和九年末に開設せられ、滞留して居ります日本人は二十人から三十人の間であります。日本からは私共の様な技術者が八人派遣せられ、「アフガニスタン」側からは六人の留学生が日本に来て勉強して居ります。

今の処日本との直接貿易はありませんが、印度商人の手を経て大量の日用雑貨、お茶、綿絲布、人絹が国内広く行き渡って居ります。駱駝や馬に乗り野宿を重ねて分け入る様な田舎にも大概日本品があります。之れは必らずしも日本品なるが故の進出ではなく日本品の価格が「アフガン」人の購買力に最も良く適合して居るからであります。

## 結論

「アフガニスタン」が日本と手を取り合って行き度い気持及 [び]一般国民の日本に多大の関心を持って居ることは確 [か]であります。色々の国際情勢は之が明確なる表現と実現を阻止して居ります。此の悩 [み]を持つ若き「アフガニスタン」を育て上げるのは亜細亜の明主日本の責務ではないであらうか。皆様の御記憶の中から「アフガニスタン」と云う国が消えることのない様、切に願ひしまして私のお話を終ります。

尚「アフガニスタン」の民衆に広く唱 [唄]はれて居る民謡のレコードが有りますからおかけ致します。花の下にお茶を飲みながら歌い興じて居る有様を御想起して頂き度う御座います。

終り

最初におかけしますものは、恋歌ナスロー、ナスロージャン。愛人の名前であります。

次にお掛けしますものは、軍記ものでありましてナデルシャー王の治世を称へたものであります。